



クロスカリキュラムの詳細を紹介

変化の激しい現代での“HAPPY”を探究し、次代を生き抜く力を生徒に育む

山梨県立白根高校

山梨県立白根高校では、2019年度よりクロスカリキュラムを実施。これからの時代を生きる生徒が深く考えるべきテーマを、複数の教科・科目で取り上げることにより、異なる角度で学ぶ機会をつくっています。本記事では、VIEW_{next} 高校版 12月号で紹介した同校の取り組みを、授業の具体的な様子などを交えてさらに詳しくお伝えします。

VIEW_{next} 高校版 12月号「誌上で見学 学びのnext」は、[こちらをクリック](#)

本記事の コンテンツ

- 1 導入の背景** 変化の激しい現代だからこそ、「幸せ」について多角的に考えてほしい
- 2 授業例** 抽象概念である“HAPPY”を、中学生に伝えるためのポスターを制作
- 3 成果と展望** スクールスローガンに基づき、具体的な行動を起こす生徒も

校長

中村千尋

なかむら・ちひろ

教職歴36年。同校に赴任して1年目。



進路指導研究係
主事

秋山香江

あきやま・かえ

教職歴37年。同校に赴任して9年目。家庭科。



進路指導研究係
副主任

遠藤優綾

えんどう・まや

教職歴21年目。同校に赴任して3年目。国語科。



学校概要

◎「自主自立」「進取研鑽」を校是として掲げ、スクールスローガン“HAPPY”の下、幸福追求を目的とするキャリア教育を推進する。シティズンシップ教育やローカルリーダー育成、地域探究学習など、多彩な教育活動を展開。ホッケー部やウエイトリフティング部などが、全国大会の出場経験を持つ。

設立 1984(昭和59)年 **形態** 全日制/普通科/共学

生徒数 1学年約130人

2021年度進路実績(現役のみ) 国公立大は、都留文科大、山梨県立大などに4人が合格。私立大は、東京経済大、早稲田大、健康科学大、山梨英和大、山梨学院大などに延べ69人が合格。短大・専門学校進学69人。就職8人。

URL <http://www.shirane-hs.kai.ed.jp/>

1 導入の背景

変化の激しい現代だからこそ、 「幸せ」について 多角的に考えてほしい

2022年度の入学生から年次進行で実施される高校の新学習指導要領では、これからの時代に求められる資質・能力を育むため、各教科等の学習の充実とともに、教科横断的な視点からの教育活動の改善が求められている。教科等間の内容事項を相互に関連づけた教科横断型学習を進めるため、山梨県立白根高校は2019年度から1・2学年の生徒を対象に、全教科・科目共通で設定したテーマについて同時期に、多角的に学ぶクロスカリキュラムを実施している。

クロスカリキュラム導入当時から実践にかかわっている進路指導研究係主事の秋山香江先生は、19年度からの取り組みの変遷を次のように説明する。

「変化の激しい時代を生きていく上で必要となる、物事を多面的・多角的に理解する力を生徒に育むことが、クロスカリキュラム導入のねらいです。これまでの授業では、各教科で扱う知識は個々に独立した情報としてインプットされがちでしたが、教科間で学習内容に関連を持たせることで、学習内容についての生徒の理解を深めるとともに、現代的な課題に対する多面的な考え方を身につけさせ、学習意欲や問題意識の持続を図ろうと考えました。クロスカリキュラム導入初年度は、各教科で『環境問題』をテーマに授業を行い、定期考査にも同テーマの問題を組み入れました。20年度からは、山梨県教育委員会のキャリア教育推進実践研究校の指定を受けたことを背景に、テーマをスクールスローガンである“HAPPY”（Be Healthy / Active / Positive / Powerful / Yourselfの5要素）に設定し、引き続きクロスカリキュラムに取り組んでいます。なお、スクールスローガン“HAPPY”をクロスカリキュラムのテーマとする際に参考にしたのが、『VIEW21』高校版2020年4月号に掲載されていた慶應義塾大学大学院教授の前野隆司先生のインタビュー記事です（*1）。経済が成長した社会での幸せのあり方について解説した同記事は、これからの時代を生きる生徒にとって、スクールスローガン“HAPPY”がクロスカリキュラムのテーマにふさわしいものであることを私たちに確信させるものでした」

クロスカリキュラムは、多面的・多角的に物事を理解する力を育むことを目的としているからこそ、生徒に身近に感じてほしいテーマ、当事者意識を持ってほしいテーマを設定することが重要だと、中村千尋校長は説明する。

「グローバル化やAIの進化によって、暮らし方や働き方が激しく変化する時代に生きる生徒たちにとって、スクールスローガン“HAPPY”は、様々な教科の視点で理解を深めることに値するテーマです。幸せとは何か、どのような時に自分が幸せを感じるのか、幸せな人生を送るために自分がすべきことは何かを考えることで、100年時代の人生を構築する力が身につくことを期待しています。また、日々の高校生活においても、生徒たちがモ

*1 『VIEW21』高校版 2020年4月号 P.16～19
記事は[こちら](#)。

チベーションを高く維持しながら、各教科の学習や特別活動に臨むことができると考えています」

2 授業例

抽象概念である“HAPPY”を 中学生に伝えるための ポスターを制作

* 2 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。



写真1 4人程度のグループになって、1人ずつ「学校の活動の中での“HAPPY”」を発表。ポスターの構成要素は、端的に“HAPPY”を伝えるキャッチコピー、具体的な活動内容、活動を通して自分が感じたことの3つだ。



写真2 発表を聞いたら、内容面と発表の仕方の面でよかったところを付箋に書いて、発表者に渡す。グループを変えて2回発表することで、生徒はより多くの目で評価してもらうことになる。

21年度の同校のクロスカリキュラムは、次の流れで進められた。まず、年度初めに各教科でシラバスを作成する際に、7月から12月の期間に“HAPPY”を題材とした授業を計画した。そして、作成した授業指導案を校内の共有サーバーに置き、他教科と共有。クロスカリキュラムの実施終了後、生徒に対してアンケート調査を行い、テーマ“HAPPY”への理解の深まりなどを見ていった。

遠藤優綾先生が2学期に行った1年生の国語の授業では、学校生活の中の“HAPPY”を紹介する中学生向けのポスターを制作するという活動を通して、抽象概念を他者に伝える際のポイントなどを学んだ(図1)。

生徒は、自分が感じる「学校の活動の中での“HAPPY”」を、写真や図などの資料を交えて1枚のポスターにまとめた。ポスター制作の際には、スクールスローガンを構成する「Be Healthy / Active / Positive / Powerful / Yourself」の5要素のどれにあたるのかを生徒に明らかにするよう求めた。授業では、4人程度のグループになって、それぞれが制作したポスターについて説明。説明を聞いた生徒は、発表者の説明の内容や仕方などでよいと思ったところを具体的に付箋に書いて発表者に渡す。グループを変えて全員が2回発表したところで、生徒は、説明が上手だった人、ポスターがよくまとまっていた人をそれぞれ2人選んでClassi(*2)を通じて投票し、即座に集計。遠藤先生は、得票数が多かった生徒に、クラスの前で改めて発表をさせた。

授業の終盤、遠藤先生は生徒が7月にクロスカリキュラムの1つとして家庭科の授業で学習した地位財、非地位財の内容を説明しながら、本時の授業で生徒が挙げた“HAPPY”はどちらに属するものだったのかを生徒に問いかけるとともに、“HAPPY”のような抽象的な内容を他者に伝えるためには、部活動、体育祭、授業など、具体的な場面を織り込みながら表現することが必要だと、国語の授業としてのポイントを確認した。

授業後、遠藤先生は、「これからの生徒には、物事をつながながら考える力が必要」と、クロスカリキュラムの意義を語った。「答えが1つではない問題について考える際には、問題を様々な角度から見つめ、一つひとつの気づきをつなぎ合わせながら、自分なりの答えにたどり着くことが必要です。『“HAPPY”とは何か』も、答えが1つではない問いであり、いろいろな教科で取り上げることで、生徒は深く探究することができるはずです」

“HAPPY”を意識することで、同じ題材であっても授業のあり方はこれまでとは変わる。国語科では、2年生の授業で、中島敦の『山月記』を“HAPPY”という観点を意識しながら読み、登場人物の幸福度の変化や、それぞれの幸せがどのような



写真3 クラス全体で特に高評価だった生徒の発表を全員で確認する。その後、高評価だった生徒の発表に対する感想、自分の発表についての自己評価を、グループの生徒からももらった付箋を、タブレット端末で撮影した動画とともに、Classiにポートフォリオとして保存する。

要素でつくられているのかを議論した教師もいると、遠藤先生は
 本校の教師の取り組みを紹介する。

「生徒には、様々な題材から、そして多様な立場から、“HAPPY”を探究する経験を経て、最終的には『幸福は、みんなで追求するものであり、そのために自分にもできることがあるのだ』といった“HAPPY”に対しての当事者としての気づきにたどり着いてほしいと考えています」(遠藤先生)

図1 家庭科の授業と関連づけて展開した国語の授業計画

| 学習活動 | 指導上の留意点 | 評価標準・評価方法等 |
|---|--|--|
| ◎導入5分 ・本時の内容と目標、評価の観点や規準の確認 ・前回までの授業内容の復習 ・アイスブレイク(清宮・草口動画) | ・スモールグループで実施した中学生に「HAPPY」を具体的に伝える、という目的の確認。 ・効果的に伝えるために、収集した情報を資料にしたこと、高年齢層の内容のまとまりごとに分けるなどの表現技法について復習する。 ・情報をどうとらえ、効果的に相手に伝える工夫を凝らして発表することを伝える。 ・「聞く態度」については、クラス独自のルーブリックを確認し、意欲喚起に繋げ、全員が参加し上手に発表することを目標とする。 | 話す・聞く能力 【評価標準】 ・スピーチをする際に資料を見るばかりなく、聞き手が理解しているか伝えているか、聞き手からの反応を察知し、必要に応じて工夫を凝らすことができる。 |
| ◎グループスピーチ10分・15分 ・2回目は、互いにスピーチを動画で撮影し、単元の終了時にClassiで提出する。 ・スピーチが上手だと褒めた人・資料が上手だと褒めた人をClassiで発表する。 | ・感想文が発表が終わるまで書かないし、相手の顔と資料を見て、相手を見ることを確認する。 ・質問・感想はその場で伝える。 ・「家庭科」の授業プリントをキーボードで検索・印刷・共有できるように復習し、今回の授業内容は非対称であることを確認する。 ・発表内容が「具体」であることの確認。授業の目的の一つに、「情報」的なことを「具体」的に理解する、があること。授業を通して「HAPPY」の具体的な理解できたと感じられる。 全体の4回(総合的な探究の時間)と、自分の発表内容を比較する。 | 知識・理解 【評価標準】 ・情報をわかりやすく説明するための工夫や態度・様子などの特徴的な発表内容を盛り込んでいる。「発表」の「具体」について、おおむね理解できている。 関心・意欲・態度 【評価標準】 ・発表を行い、積極的に積極的に用いた場面に参加しようとしている。発表者側を聞き、意見や感想をまとめる自己の発言を促すようとしている。 |
| ◎代書者発表(1→5人) スピーチ 聞き手の反応を見ながら、言葉を繰り返したり、工夫を取り入れたりする。 | ・小グループでの聞き手経験を想定させ、情報をわかりやすく伝えるためにどのようなスピーチをするべきかを自分で考えさせる。 | 【評価方法】 ①自己評価(Classi) ②教員評価・発表の様子、提出された個人やグループの資料・Classi上の質問や感想を確認する。 |
| ◎振り返り 聞き手を打つなどの反応を促す。 Classiで感想を入力する。 | ・スピーチのじょうずにならないように復習しながら聞き手の反応(質問)を確認する。 ・意見や感想の力は発表者に与えるメッセージであり、スピーチは相互交流であることを伝える。 ・代書者発表から学んだことを次の自身の発表に生かすことをアドバイスする。 | グループ発表での感想文の確認及び代書者発表と自分の発表を比較することで、次のスピーチへの工夫(個人やグループ)に繋げる。 |
| ◎学習のまとめ10分 自己評価・教師の記入 教師の手記 | | |

タブレット端末を用いて、生徒各自に発表を記録させ、Classiに保存させることで、授業内で観察しきれなかった発表の様子を、遠藤先生が後日評価できるようにした。

※学校資料をそのまま掲載。

3 成果と展望

スクールスローガンに基づき、具体的な行動を起こす生徒も

21年度は、1学年の「情報」の授業で、プレゼンテーションソフトを使って“HAPPY”を実感するために必要な要素を、KJ法を用いて整理したり、「美術」の授業で、“HAPPY”をテーマにしたストップモーションアニメーションの制作などに取り組んだりした。学校の教育目標や育成を目指す生徒像に関連するテーマを、複数の教科において様々な角度から学習していくことで、生徒の行動にも徐々に変化が表れている。例えば、夏季休業中、“HAPPY”をキーワードに日常を見直し、高齢の家族のために屋内に手すりを作った生徒もその1人だ。

「“HAPPY”を頭の中で理解するだけではなく、“HAPPY”をつくるために自分ができるとは何かを考え、周囲を巻き込みながら実践できる力を身につけてほしいと思っています。今は、どの学校でも、生徒の自己肯定感を高めることが重要な課題となっています。そんな中だからこそ、私たち教師にとって“HAPPY”は、どんなテーマよりも、生徒が自分事として捉え、行動へとつなげてほしい重要なものだと思います」(秋山先生)

21年度のクロスカリキュラム終了後、前述の前野隆司教授の記事などを参考に作成したアンケートで、生徒に自身の幸福感につ

いて聞き、取り組み前後でどのような変化が表れたのかを検証する予定だ。

「山梨県の県立高校は、21年度中にスクールポリシーを策定し、22年度には各教科でスクールポリシーと関連づけた形での教育活動の改善が始まります。本校では、スクールスローガン「HAPPY」をスクールポリシーに昇華しながら、地域の幸福追求に貢献できる人材要件とその育成のための指導を確立することになります。授業、特別活動、部活動など、教育活動のすべてを、生徒の「HAPPY」へと結びつけていきたいと考えています」（中村校長）